

基調講演 要旨

(上田)

このたび、府中市新庁舎建設の設計者に選定していただきました「千葉学建築計画事務所・久米設計 設計共同体」です。ただいまご紹介いただきました久米設計の上田です。よろしくお願いします。

私は1988年に久米設計に入社しました。いわゆる専門の組織設計事務所として27年の実務経験がございます。そのなかで、重要なポイントとなったプロジェクトを2つご紹介したいと思います。

まず、群馬県高崎市の高崎シティホールです。

1998年の竣工ですが、プロポーザルから竣工まで約8年かかり完成しました。ちょうど府中市もそれくらいの時間が必要になると考えています。庁舎のほかにホール、展示ギャラリーを持つ文化施設、地下に大きな地域用駐車場をもつシティホールとして整備されました。市ではちょうど高崎城址エリアを中心として都市整備を進めている時期にあたりました。城址公園、お濠と土塁、A・レイモンドによる音楽ホールなど、特徴的な都市景観を活かしたシティホールが実現できました。庁舎の高さについてはシンボル性を高めたいとの市の強い要望により21階建となりました。

こちらは完成後の全体像ですが、庁舎を中心に広場や音楽ホールなど、それらを繋ぐネットワークは市民の利便性を高めるとともに、観光客などこのまちを訪れる人たちにとっても高崎を強く印象付ける結果となりました。

建設地は東京から100キロ圏のため東京とは気候的に大きな差異はありませんでしたが、この地方特有の「からっ風」が非常に強いという地域です。

高さ100メートルの高層庁舎の風害を和らげるため、風環境から生まれた楕円形の平面を持っている庁舎です。風環境に配慮したこのかたちは、新幹線や旧中山道を通る車から見る位置によって刻々と形を変えていく「塔」のように見えることで、今も高崎市のシンボルとなっています。

内部は、窓口業務とは分けた形で市民スペースを設けました。それにより各種イベントやスポーツ大会等のパブリックビューリングなど市民イベントにも非常に積極的に利用されています。

続いて水戸泉町1丁目の再開発のプロジェクトです。こちらは地元の百貨店をテナントとした商業施設ですが、隣接する水戸芸術館との人の動線を考慮し、まちかど部分に屋外と屋内の広場空間を設けました。

やはり賑わいづくりがテーマであり、吹抜け空間やサンクンガーデンを設けて明るく開放的な場になることをイメージしました。以上が、私の紹介となります。

す。

(千葉)

改めまして、おはようございます。意匠担当責任者の千葉学建築計画事務所の千葉学と申します。私も府中の新庁舎の説明をする前に、少しだけこれまでどんな仕事をしてきたかということをご説明したいと思います。

最初いきなり宣伝みたいになってしまいますが、最近「人の集まり方をデザインする」という本を出版しました。基本的に建築は、人が集まるためにつくる、といつも考えています。これまで、それぞれの地域や建物の用途に応じた人の集まり方について考えながら取り組んできました。

そのなかで、つい最近できました、八王子にある「工学院大学 125 周年記念総合教育棟」について紹介します。主に講義室や研究室などが集まっている建物ですが、ここでは大学の原点とは何か、ということについて根本から考え直しました。大学はもちろん教育研究の場ですが、その原点は、たくさんの人が集まって、様々な形で知識や技術の交換が行われたことにあります。そこでなるべく様々な活動の様子がいつもお互いに見える関係を築こうと考えました。このことによって一緒に学んでいるということがいつも体感できるようにしたものです。

また、これは全く違う用途ですが、富士山の裾野に「日本盲導犬総合センター」をつくりました。小さな建築が集まって集落のような場をつくったものです。これは盲導犬を育成するための施設ですが、その一方で、盲導犬の活動を広く社会に知ってもらおうということで、たくさんの方に来ていただくとした施設です。盲導犬を育成するための守られた環境を作りながらも、なるべく地域に開かれた場所を作るという相矛盾する要求を実現しようとしてしました。実はこの敷地はもともとオウム真理教の総本山があった跡地でしたが、今では地域の方々が集まって学校の教育の一環としても使用される場になっています。

最後に千葉県の夷隅郡に竣工した「大多喜町役場」という小さな町役場について紹介します。府中ほど大きな町ではなく、人口 1 万人くらいの小さな町です。そのくらいの町ですと、皆さんちょっとした相談事でも気軽に役場にやってきます。そのため、木漏れ日が落ちてくるようななるべく大きな屋根をかけて、この町ならではの自然が感じられるような場を作ろうと考えました。このように、常にどんな形で人が集まれば良いかということを考えながら建築をつくってきました。府中の新しい庁舎についても、同じような考えを持っています。

庁舎は普通、用事がないとなかなか行きませんが、この府中では、用事がないでもつい行ってみたくなるような庁舎にしたいと考えています。そのためには、府中の歴史・自然・市民を紡いでいくことが何よりも重要だと考えました。今回の計画を通じて府中の町に何度も足を運びましたが、大変魅力的な町だと思います。

ました。大國魂神社をはじめとする数々の歴史的資産ももちろんそうですし、緑が豊かで自然に溢れているところもそうです。また、大変印象深かったのが、市民の方々が生き生きとしている姿が、町のあちらこちらで見られることです。そういうことを一体的に計画することが基本的な考えでした。

建物はこのように、「おもや」「はなれ」「なみき」の3つの要素を有機的に絡め、新しい庁舎をつくろうと考えています。「おもや」は主たる庁舎機能を担い、「はなれ」は市民協働を支え、「なみき」は府中の自然を象徴するものです。このような「おもや」と「はなれ」、「なみき」が絡み合うことで、庁舎の敷地の中央に「通り庭」と呼ばれる、だれもがどこからでも入ってこれるような庭ができることになります。ここに来ると、いつでも庁舎で行われている様々な活動の様子が感じられると思って計画をしました。

さらにこの通り庭が、大國魂神社から府中駅へと繋がる並木道、あるいは府中駅から府中本町駅をつないでいくような形で町に広がっていくといいと考えています。会場の後ろに模型を展示していますが、「おもや」と「はなれ」、その間にできるケヤキ並木と一体になった「通り庭」が特徴的な建物です。

少し建物の中の具体的な話をしますと、基本的には「おもや」と「はなれ」は執務空間としては、大、中、小とそれぞれのスケールに応じた空間があります。それぞれの空間がお互いに連携をしながら庁舎機能を担っていきます。例えば、1階では「おもや」の中央のわかりやすい位置に総合窓口を配置します。

「はなれ」には、食堂やカフェ、あるいは府中の様々な情報を発信するようなギャラリーや情報コーナー、歴史コーナーなどがあり、日常的に市民の方々が触れ合えるような場所にしています。

また、交通計画も非常に大事で、基本的には府中街道のほうに車のアクセスなどを集約し、また、駐輪場なども使いやすい場所に適宜配置しながら、計画をしていこうというものです。

2階から上は基本的には同じですが、特に「おもや」は、なるべく長期にわたってフレキシブルに使っていただけるような、大変大きな空間でできています。また、2階の「はなれ」は、図書館やカフェ、あるいは市民協働で自由に使っていただけるような場所が展開しています。3階になりますが、同じように会議室、あるいは、現在、府中の庁舎は分散していますが、そういったものが全部ここに集約的に集まってそれぞれが一体となって市民の方々へのサービスができるような形になっていると考えています。4階はちょうど通り庭に面した中央部には市長室を計画していて、庁舎全体を見渡せるようになっています。最上階は、議会のスペースをある程度独立させて設けています。ただし、一部はだれでもがやって来れる展望ラウンジとして開放することで、遠くは富士山を見れるような計画にしています。

このように「おもや」と「はなれ」をつくることによって、例えば、休日利用にも大変上手く機能することになっています。「おもや」のセキュリティは高めながら、休日には「はなれ」だけを開放することも自由にできる計画です。

また、このような庁舎は災害時にも色々と考えていかなければいけません、災害時にも、「おもや」と「はなれ」、「通り庭」は、有効に働くと考えています。おもやは災害対策拠点として、また通り庭は屋外ですので、物資の搬入など様々な形で使えるようになっています。「はなれ」は炊き出しの場所や、ボランティアの待機場所として使うなど、随時機能転換していくことが可能です。

私たちがもう一つ大事にしたのが、先ほどの高野市長からの話にもありましたが、府中の宿場町としての長い歴史です。その面影は、今でも町のあちらこちらに見ることができますが、その宿場町の大変魅力的な風景、つまり軒先が連なってそこに人が休憩したり集まったりする、そういった雰囲気を実代的な形で改めて再現したいと考えたわけです。新しい庁舎でも、「おもや」と「はなれ」のあちらこちらに軒下空間があり、そういったところにいつも人が集まれるようなことを考えていきます。通り庭を抜けていくと、随所に軒下があり、様々な活動の様子を見ていただけるような形になっています。

こちらは、「おもや」の窓口から通り庭を見ているところですが、日常的に通勤や通学の過程で通り抜けていただいて良い場所だと考えています。

また、こちらはちょうど大國魂神社から府中街道を見渡したところになります。このような形は実は風環境にとっても大変有効でして、今回はなるべく建物を低層に抑えて、特に大國魂神社の快適な空気を庁舎に呼び込んで、日頃から自然エネルギーを活用した形で庁舎を使っていけるようにと考えています。

また、構造的にも今回は免震構造を採用して、建物全体が大変安定した安全安心な建物になっています。

外壁には、有孔パネルという孔のあいたすだれのようなものを取り付けて、日射や視線を穏やかに制御するようなことも合わせてやっていこうと考えています。

常に様々な役所での活動の様子が溢れる、あるいは、夜には穏やかに庁舎の姿が浮かび上がる、そんな庁舎ができると良いなと考えています。

これはお祭りの時の通り庭の風景です。くらやみ祭りの御神輿も通り抜けていってくださると良いなと考えています。

(上田)

今回我々の設計チームは、千葉学建築計画事務所と久米設計のJVという形で進めさせていただきます。所謂、アトリエと組織事務所、各々の特長を活かしながら協働して設計を進めたいと考えています。個性やオリジナリティを活か

し、多様な人材で確実にワンストップで業務を進めていくというイメージを持っています。

新しい庁舎建設に向けて、時代が色々と変化していくことが想像されるわけですが、変わっていくことがすべてではなく、まちの記憶や人と人とのつながりを大切にし、いかにその街に愛着を持って永く暮らせるかという視点が大切だと思っています。

シティ・ホールとなる庁舎にはそれを引き出す可能性があります。市民と協働でつくる、庁舎に出来ることは、まだまだたくさんあると強く思っています。

(千葉)

最後に私から、庁舎建設に向けての思いを少しお伝えしたいと思います。まず何よりも、この町は大変魅力的な町です。様々な市民協働の姿というものを、実際に町を訪れても体感することができます。そういったことがこの庁舎に凝縮して集まってくるというようなことで、何かこれまでの非常に堅苦しい庁舎のイメージではなくて、そこに行くといつも皆さん気軽に集まっていて、様々な新しい町のあり方を議論している姿が目飛び込んでくるような庁舎を造れると良いなと思っています。新庁舎が完成するのは7年後で随分時間がかかってしまうわけですが、7年経っても色あせることのない魅力的な場所として作っていきたいと思っていますし、完成した暁には、それが新しいこれからの時代の庁舎として、世界に向けても発信できるようなものにしていきたいと考えています。

以上で庁舎の説明を終わらせていただきます。